

ファデーラ・ビード
アルジェリア人ジャーナリスト

アゼルバイジャン発見の旅

DAR EL ATHAR AL ISLAMIYYAH が最近企画したアゼルバイジャンへの旅は、とても楽しいものでした。私たちはこの国の歴史について、ぼんやりとしたイメージしか持っていませんでしたが、はじめて訪れるこの地での新たな発見を楽しみにしていました。

ホテルに着いたあとで、美しく印刷された冊子を手渡されました。そこにはこれから9日間の予定がリストアップされています。私たちはこの予定に沿ってAzDipServisの3人のスタッフと過ごすこととなります。まず最初に、幹線道路沿いのドライブに連れて行ってもらいました。ガイドが案内してくれたのは、市民公園、大統領宮殿、さまざまな様式の建築群、中世の城壁、豪華なビル群に加え、カスピ海の雄大な眺めです。予定されていたコースはとても魅力的でした。アゼルバイジャンは、シルクロードの交差点にあたる場所として知られ、イスラムの時代から現代にいたるまで、彩りに溢れていました。香辛料の交易地として衰退して以降、この国は幾度もの政変を経験してきました。そのうちのいくつかは痛ましいものでした。さまざまな建築様式の存在は、この国がかつてさまざまな勢力の支配を受けていたことを暗黙のうちに物語ります。敵であれ味方であれ、かつて

の支配勢力が残した建造物は、その影響の大きさを暗示します。今日私たちはこの国で自由を味わうことができ、与えられる全ての情報を理解することができます。

朝食をたっぷりととったあとで、私たちを乗せたバスは殉教者通りと榮譽通りに向かいました。ここには名高い人々が埋葬されています。私たちは赤いカーネーションを手渡され、色とりどりのチューリップやヒナギク、そして巨大な松の木々に覆われた庭園へと案内されました。この国の芸術、科学、自由のために命を捧げた大事な人々の役割についてガイドが説明してくれました。私たちはこの場所の平穏な雰囲気にも包まれるとともに、たくさんの写真を撮りました。そこからさらに丘を登ると、そこには白銀に輝くカスピ海の眺望が広がり、細いミナレットを備えたオスマン様式のモスクがありました。

バクーとは「風の街」を意味します。

バクー夜景



バクーの道路沿いはオリーブ、カエデ、松、ユーカリの木々で溢れています。ノーベル兄弟はかつて2世紀ほど前に、痩せた裸の土地は、安い税金と引き替えにもたらされた肥沃な大地と植物に覆われるべきだと考えました。石油貿易が増大するにつれて、裕福な起業家たちがヨーロッパの近代様式で家を建てるようになりました。しかし旧市街はこうした変化にもかかわらずその後も変わらず立派に残り、今ではユネスコ世界遺産のリストに登録されて主要な観光名所となっています。私たちは12世紀に作られた古い城壁をくぐり抜け、第35代のシャーのために建造されたシルヴァン・シャー宮殿へと向かいました。石畳の道を通って宮殿の豪華な中庭に着くと、そこから砂岩で造られた邸宅へ入るまでの間、質素な尖塔と壮大な霊廟を持つシャー専用のモスクを眼下に眺めることができます。52

室からなる邸宅は、それぞれの部屋が木製の格子で守られた尖頭アーチ型の窓に飾られ、幾何学的な枠組みから自然光が差し込むようになっています。今はもう空っぽですが、かつては豪華な絨毯にシルクのクッション、そして最高級のカーテンが備わっていたというガイドの説明からは、その様子がありありとイメージできました。15世紀から16世紀に建てられたこの宮殿は、シャーの家族が住む一角として、また重要な家臣の住居として使用されていました。この宮殿にはハマムと呼ばれる浴場に加えて、地下には貯水槽も備え付けられていました。当時水は大変貴重だったので、大所帯の生活を支えるためには大量の水を蓄える必要があったのです。

宮殿の近くにあるミニアチュール本(豆本)の博物館では、ほとんどが無名の作者による、コーランや歴史、詩など



が点にしか見えないような極小文字で書かれた本など、珍しい品々が展示されていました。こうした品々が作られる様子を間近に見てみたいという好奇心がかき立てられました。さらに100メートルほど離れたキャラバンサライ(隊商宿)のレストランでは、生バンドによるアゼルバイジャンの伝統音楽の生演奏が私たちを迎えてくれました。ここではじめて生のハーブをふんだんに使った野菜とグリルした肉の味を体験しました。もちろんとても美味しかったです！

私たちはさらに旧市街の散策を続けました。狭い路地にひしめき合うように並ぶ2階建ての家々がとても気に入りました。頭上にはオスマン様式で造られたバルコニーや、窓の上部に施された素晴らしい彫刻が見られます。居住者たちが共同で使用している中庭も見せてもらうことができました。果物売りの小さな店に立ち寄りました。たくさんの実用的な品物を売っていました。私たちは、地元の人々が近代的なバクーの街に囲まれたこの旧市街を愛し、守っている様子に感動を覚えました。12世紀におよぶ歴史をもつ旧市街は、まさにバクーの中心といえます。いくつもの小さなモスクと5つの

公共浴場は、この旧市街の必要を全て満たしています。神秘的な「乙女の塔」にも興味をそそられました。塔の役割から考えれば、巨大な展望台としての役割を果たしていたに違いありません。この中世の史跡は何世紀もの歴史を背負っているのです。旧市街は力強い城壁でしっかりと守られていました。遠くから見るとそれはまるで強固な盾のようです。

アゼルバイジャンの政府当局は、国の遺産を保存する博物館をいくつも建てるために大変な努力をしてきました。そのためこの国には100以上の博物館があります。アゼルバイジャン国立絨毯・実用芸術博物館に入った際には、子どもたちの団体と出会いました。2階では壁に丁寧に掛けられたたくさんの絨毯に圧倒されました。たいていの場合、誰が織ったのかはわかりませんが、模様のパターンは今でも地域ごとに同一のものが使われます。学芸員の方が、標準的な絨毯とキリム絨毯、タブリーズ絨毯の違いを示しながらパイルや色、モチーフやテクニクの意味を親切に教えてくれました。昔の人々は絨毯を日々の家庭生活の中で使用していました。かつてこの人々は絨毯の上で生まれ、絨毯の

新旧が調和するバクーの街並み



上で亡くなったのだそうです。装飾的な衣装やアクセサリ、日用品は私たちの目を大いに楽しませました。その上階にあった劇場博物館のことも忘れられません。アゼルバイジャンの物語や詩、国内外の音楽に関心を持つ芸術家たちにぜひ訪れてほしい場所です。なかでも「ライラとマジュヌーン」は傑作として広く知られている恋愛物語です。

1日を締めくくったのはバクーの港に浮かべた船上での素晴らしいディナーです。カスピ海に近接した大通りは、ホテルまでの道を散歩して帰るのにもう一つつけでした。観光客という立場を忘れ、我が家にいるような気分で夜のカスピ海に吹く風を楽しみました。

金曜日にはさらなる発見があるのを楽しみにしていました。それは、完全に復元されている13世紀のビビ＝ハイバート・モスクです。巨大な中庭を抜けて

霊廟の中に入ると、一面緑のタイルに覆われた壁に沿って施された金や銀の装飾が、静寂の中で熱心に祈りを捧げる人々の穏やかな雰囲気と対比を成していました。霊廟の上方、ドームの内部にあたる部分では深い緑のタイルが柔らかい輝きを放っていました。イスラム様式の装飾は、芸術がいとも簡単に地域を超えて伝播するさまを思い起こさせます。

私たちは次にコーカサス山脈の麓にあるゴブスタンの考古学遺跡に向かいました。ここは歴史上もっとも古い居住地とされる場所の1つで、私たちはとても驚きました。巨大な岩がでこぼこと並んでいる光景は果てしない年月の経過を物語ります。私たちはさまざまな時代に彫られた人や動物の石画を目にしました。さらにラテン語やアラビア語の文章も刻まれていました。ガイドが骨や隅にまとめ

て捨てられていた残飯などの重要な発掘物を見せてくれました。また、ダンスもしくは集団で狩りを行っている様子を描いた壁画を驚くほど近くで観察させてくれました。私たちは皆とても感銘を受けました。

その晩は国立フィルハーモニーホールでの民族芸能のパフォーマンスに招待されました。このホールは1912年にルネッサンス様式で建てられたもので、両脇に2本の細い塔を構えた銀色のドームは見る者を驚かせます。建物の中に入った私たちは、精巧に金の装飾が施された天井を持ち、きれいに半円状に座席が並べられたコンサートホールへと足を踏み入れました。私たちはショーのダ

15世紀の遺産、シルヴァン・シャー宮殿には観光客の姿が絶えない



ンスが始まるとともにその見事な芸術性に圧倒され、たなびく長い衣装とヘッドスカーフをまとった女性たちが優美な身ぶりで踊るさまに見とれました。男性たちの衣装は女性のものとは違い、荒々しさやかっこよさが際立つもので、彼らが本物の剣を使って披露した演武は熟練を必要とするものでした。まさに神業です。伝統的な楽器を使った演奏にも触れ、ノリの良い音楽に合わせて私たちも一緒に足を動かしました。もちろん終演後には他の多くの観客に混じって素晴らしいアーティストたちとの写真を撮りに行きました。

翌日に予定されていた近代博物館への訪問は、予想を大きく裏切りました。建物の外観はいたって普通でさして魅力的ではありませんでした。しかし中に入るとこの近代的な建物はその様相を一変させたのです。部屋はそれぞれ区切られていましたが、純潔の色である白で統一されていました。中庭はガラスの天井で覆われ、私たちが慣れ親しんでいるオリエンタルな雰囲気を持っていました。私たちはこの雰囲気がたいへん気に入りました。展示された芸術作品にも感心しました。あらゆる芸術様式に精通しているわけではありませんが、それでも世界的な傑作というもののはつねに今までになかった新しい何かを見せてくれます。まるでゴッホ・カフェのように装飾されたコーヒーショップもありました。ミュージアムショップではお土産に打ってつけの英語版の本も買うことができました。

私たちは次にノーベル兄弟の家を訪れました。彼らは19世紀後半に10年以上にわたってバクーの油田に石油工場を建設し、バクーに真の繁栄をもたらしたのです。素晴らしい庭つきの邸宅は、

イスラム建築の古遺産、ビビハイバット・モスク



復元されて当時の上等な家具や写真、書類などが置かれ、彼らがいまだにここで暮らしているかのようです。

私たちを乗せた車は、市内から数キロほど離れた場所にあるゾロアスター教のアテシュギヤーフ寺院に向かいました。16世紀のアラブ人地理学者イブン・イリヤースは「…バクーから1マイル離れたところにたいまつもなく炎が燃え上がっている場所がある…」と記しています。アゼルバイジャンはかつて炎の国として知られていました。15世紀にゾロアスター教を伝えるために巡礼者のキャラバンを組んで訪れたインド人のグループがこの炎に惹きつけられたのも当然といえるでしょう。私たちは来訪者のための26の

部屋がある建物へと入ってゆきました。中庭の中央にある祭壇には小さな火が灯されています。といっても今日ではガスを使っていますが。ゾロアスター教では炎は神聖なものとされています。いくつかの部屋ではゾロアスター教の発展や、巡礼者の生活様式などが展示されていました。当時の真の信仰が示されたサンスクリット語の教典や詩、典礼文などもありました。言い伝えによれば、炎を飛び越えることで肉体が浄化されるのだといいます。巡礼者たちは当時、家族のように部屋を分け合って質素でつましい暮らしをしていました。このように、歴史あるゾロアスター教はインドとアゼルバイジャン2つの国の人々を結びつけていま



した。今日ではこの歴史的な地を誰もが訪れることができます。

次の目的地はコーカサス山脈の麓に位置するシェキの町です。私たちは、美しい駅舎を持つバクー鉄道駅から夜行列車に乗ってシェキへと向かいました。キャビンに乗り込んだ私たちはまるで小学生のようにわくわくしていました。女性の乗務員から飲み物を受け取り、電車で心地よく揺られて眠りにつきました。翌朝6時頃ガイドに起こしてもらうと、何人かはすぐに窓から見える風景に釘付けになりました。そこには緑の大地のすばらしい光景が広がっていました。朝早くから大群の羊を連れた羊飼いです。小川が流れ、どこまでも丘が広がっています。なんとすがすがしい景色でしょう。私たちはこの国の中心に位置する、文

明の手がほとんど入っておらず、原初の風景が残されている場所に來たのです。

駅に到着すると町長に出迎えられ、ホテルまで車で移動しました。そこでは豪勢な朝食が私たちを待ちかねていました。朝食が済むと絹織物工房を訪ねます。養蚕から生糸、絹織物、絨毯それぞれの生産者にいたるまで、絹織物産業はこの地を通るシルクロードとの関わりからとても大切にされています。もちろん、シェキが古くからの伝統を保持し続けているという話はすぐに納得できました。シェキは、背景に山々を仰ぎ、堂々たる木々に囲まれた場所に位置している素敵な町です。この町の産業は、環境に優しい製品だけで成り立っています。とある店に入った時に我々が目にしたの

は、女性がほとんどの職場で、糸巻きにまとめられた細い糸をチェックしているところです。絹を織って素晴らしい絨毯を作り上げるまでのさまざまな行程を見学しました。仕事場を見学できる場所では釘付けになってしまいます。

シェキ・ハーン宮殿に向かう途中の道路には、ライラックの木が紫色の花を結び、美しいアイリスの花が咲いていました。宮殿の2階建ての邸宅は1761年に建てられました。メインルームの中に入ると、天井と壁の芸術的な装飾に驚かされました。ステンドグラスになっている南向きの窓と窓をかたどっている幾何学的なパネルによって、外から入ってくる自然光は虹色へと変化します。壁のパネルには花の模様があしらわれています。もちろん植物や果物、そして鳥たちも描かれています。これらは町の入口で実際に見たものとそっくりでした。木組みや各部屋の構造はイランやインドで見られるものを思い起こさせます。私たちはここを時間をかけてゆっくりと見学することができました。地元のガイドがそれぞれの部屋の役割と描かれている絵について、歴史的背景とともに説明してくれました。ガイドによれば、なかでもザクロには特別な意味が込められていて、世界を象徴するものと考えられていたのだといいます。というのも、果実の内部でたくさんの種子がいくつかに仕切られているザクロの実は、まさにたくさんの人々とその共同体を表しているからです。天井の下には部屋をぐるりと取り巻くように戦いの様子が描かれていました。しかも戦っている男たちがひとりひとり描き分けられていました。

背の高い家具はほとんどありませんが、その代わりに東方の特徴である低い



テーブルと、たくさんの絨毯やクッションが置かれています。こちらのほうが固い椅子よりも快適にみえます。この宝石のような邸宅を建てた人物は、快適な広さと自然の要素に加え、人目を避ける低い入口と、外の庭への眺望がきく木製の大きな窓とを結びつけることで最高の環境を作り出しました。決して真似のできない場所の思い出を残すために写真をたくさん撮りました。

外に出ると、そこでは地元の音楽家によるコンサートが始まりました。そこでは弦楽器（ウード、サズ、カマンチャ）を使った演奏が、歌手たちそしてきれいな踊り子たちとともに披露されました。私たちも一緒に踊りに参加してしまうほど、良い雰囲気でした。お茶とお菓子がふるまわれました。

夜は17世紀からの歴史ある古い宿が集まったキャラバンでの夕食に招待され



15世紀の遺産、バクーのブハラ隊商宿

ひっそりとたたずんでいました。教会内部のつくりや色あせた壁画からは、キリスト教の初期の様子を窺い知ることができます。ガラス張りの床からは地下の埋葬所が見えます。ここでは古代の巨大な骸骨が発見され、研究が進められています。この教会はもともと、ある家族の所有物でした。彼らはこの教会が国に寄贈された後もこの管理を任されています。私たちは庭に招待され、お茶とお菓子をいただきました。

ました。ここには部屋が300もあり、かつては商人たちの住居として使われていました。内部にはラクダと馬をつないでおくための場所や、素敵な庭そして泉もありました。各部屋にはバルコニーがついていて、今日では旅行客が宿泊しています。食事が供されるのは熱を逃がすために天井がアーチ状になっている細長い部屋です。さまざまな料理がテーブルいっぱいになり、私たちはこの地方の調理法で作られたあらゆる料理に舌鼓を打ちました。宿の主人はここシエキの町について、この町が現代社会で果たしている役割について話してくれました。

翌日、町を離れる際に私たちは改めて非公式の歓待を受け、贈り物をもらいました。私たちを乗せた車が出発したのもつかの間、シルクやベルベット、木彫りの彫刻や手作りの民芸品を売る地元の店で止めてもらい、この素敵な場所のお土産を買いました。

次の目的地は幹線道路から離れたところにある小さな村、キシユです。でこぼこ道を越えた先には、400年前の古代アルバニア教会が伝統的な集落のなかに

続いてカバラに着いた私たちは、レジャーセンターの近くで焼きたてのパンを含む伝統的な食事をいただいた後、コーカサス・リゾート・ホテルにチェックインしました。しかしながら、このリゾートで私たちはすっかり混乱してしまいました。豪華な建築様式が場違いに思われたからです。内実も完璧な接客、申し分のない部屋、レストランに加えスポーツセンターまで備わっていて、完全に観光客向けのホテルでした。部屋の窓からは外の泉のせせらぎの音が聞こえ、どこか遠く離れた平穏な場所、居心地の良い環境を求めてやってきた人にとっては魅力的な恩恵なのでしょう。

私たちは地元のレストランで昼食を取りつつバクーへと向かいました。どのレストランも、それがどこにあろうとも多くの来訪者を泊めることができるようになっています。そしてレストランそれぞれにまた異なる文化的発見があると感じました。何世紀にもわたり「香辛料の道」沿いで行われてきた交易とともに、料理の才能もまた遠く離れた土地へと広がっていったのです。フレッシュハーブ、オリーブ、野菜を使った前菜、ピラフやそれに添えら

18世紀の遺産、シェキ・ハーン宮殿(シェキ市)

れた鶏肉，グリルした肉や魚など，バリエーションに富んだ食事はどれも常においしく，お茶とお菓子は心地よい休息をもたらしてくれます。訪れた町はそれぞれ異なる味覚で私たちを楽しませてくれました。

バクーに着くともう旅はおしまいです。いつものように素敵な夕食が用意されていました。滞在したのは街の中心に近い場所にある快適なホテルです。その晩はオペラ・バレエ劇場でドン・キホーテを鑑賞しました。劇場に着くとすでに多くの人々が列を作っていました。内部は20世紀初頭のフランス様式に似て，金でかたどられた内装と大きな石像で装飾されていました。クラシックバレエのダンサーは魔法のような音楽に合わせて蝶々のように舞い踊っていました。バレエの後で訪れた豪華な内装のレストランでは才能溢れる3人の若い音楽家が生演奏をしていました。

翌朝は絨毯の館を訪れました。オリエンタル風の屋敷が改装され，最高級の絨毯を販売するギャラリーになっています。作業場は織工であふれていました。近代的な機械では自然由来の染料が使われているそうです。屋外には噴水の周囲にたくさんの伝統的なオブジェが配置されていましたが，これらを作る職人は減ってきているのだそうです。ギャラリーのフロアは貴重な絨毯がいっぱいに並べられていました。機械では織ることのできない職人技の品々です。詳細な



説明が載ったカラー写真カタログをもらいました。

私たちはガレヤレストランで昼食をとりました。ここには燭台やフロアランプにはじまり，絵画や彫刻にいたるまで贅沢な品々が至る所に並べられていました。内装は風変わりでしたが，食事の質が落ちるといことはありませんでした。その後，近代的なバクーでショッピングを楽しみました。

その日の夕方，私たちはホテルのロビーに集まりガイドに別れを告げました。私たちDar El Athar El Islamiyyahのメンバー31人は皆ですばらしい経験を分かち合うことができました。今回のアゼルバイジャンの旅では裏方でクウェート人があらゆる細部に至るまで尽力し，助けてくれました。今回の訪問は楽しく喜ばしい驚きに溢れていました。アゼルバイジャンは私たちにとって，かつて訪れた国々を歴史的な交通ネットワークの中で結びつける1本の糸になったのです。興味深い経験だったかですって？もちろん，アゼルバイジャンのことが大好きになりました！◆